

門司城の古瓦

門司区 前原 平三郎

とどまることを知らない開発・休耕田を設ける一方で大々的に行われている圃場整備事業、果して埋蔵文化財はどれだけ守られ、保存がなされているであろうか。現在、一年間に刊行されている発掘調査報告書の数は知りうべくもないが、恐らく膨大な量に達しているに違いない、それは直にその数だけの遺跡が消滅したことを意味する。発掘された遺物が収容しきれずに、資料館の床下に放置同様の姿で山積みされた状況をテレビで見せられては、ただ黙然とする許りである。

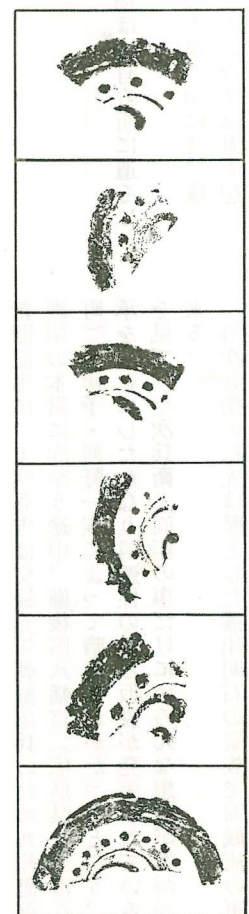
発掘調査中の横で、ブルドーザーとユンボが待機しているような状態(総ての調査がそうだとはいわれないが)のなかで実のある調査成果は得られるのであろうか。先行する開発の前に、発掘調査自体が、知らず知らずの裡に破壊を前提としたものになっているのではないか。そして、これから十年もすると、先人が残した文化の跡は見られなくなるのではないかと、多少なりとも埋蔵文化財に関心を持つものなら筆者と同じ怖れをいだいているのではあるまいか。

そうはいっても、開発を一方的に悪者呼ばわりする積りはない。今日、我々が享受している繁栄(？)も、そして、又、戦後の考古学のめざましい進歩・発展も、開発が大いに寄与していることを認めないわけにはいかないからである。しかし、開発による破壊が考古学に寄与しているというほど皮肉で、矛盾していることはない。発掘調査も破壊である、という論がある位であるからである。しかし、我々はこの矛盾を解決し得るであろうか。否、今こそ、これをなんとかしても解決しておかないと、後世、必ず「昭和の大破壊」と指弾されるに違いないのである。

閑話休題、門司城址も破壊の歴史から免かれるものではなかった。元和元年(一六一五)、一國一城令による取り壊し、下つて明治後の要塞構築(既に文化遺産となりつつある)、今次大戦中の高射砲陣地築造、又、戦後に至っての船舶無線基地設置、そして、公園化に伴う整備工事と西三度にわたる改変に、古城山頂は変容し、かつての門司城址はない。いまは僅に山頂直下に石組の遺構の一部

を見る許りである。そして、城址を語るものといえば、附近に散布する古瓦だけである。その古瓦にふれる前に、門司城興亡の歴史を、最近建てられた碑に尋ねてみよう。

門司城の古瓦



門司城(門司関城・龜城)
門司城は、最初平知盛が源氏との合戦にそなえて、長門国目代紀井通資に築城させた、といひ伝えられている。寛元二年(一二四四)、下総前司親房が平家残党鎮庄の下知奉行として、鎌倉幕府より豊前国代官職に任ぜられて下向。のち門司六ヶ郷と筑前香椎院内などを拝領した。親房の子孫は地名により門司氏を称し、門司城を本城に領内に足立・吉志・若王子・三角山・金山の五支城を構えてそれぞれ一族が配置された。門司氏はその後およそ三五〇年にわたって北九州の地に続いた。

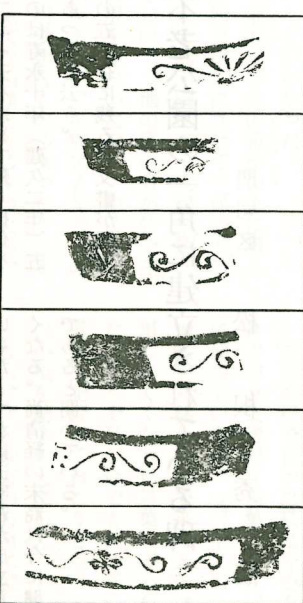
その間、南北朝時代には北朝武家方の吉志系門司左近將監親尚が拠り、一方南朝宮方の伊川系門司若狭守親頼は猿喰城に籠り、骨肉の争いもあった。

室町時代になると、門司半島は豊後大友氏と大内氏、大内氏滅亡後はかつて毛利氏が争奪するところとなり、当城はその渦中におかれた。ことに大友・毛利両氏による永祿の門司城合戦は壯絶をきわめ、ちなみに「後太平記」には、「昔、源平両家此処に軍せしも、時こそ替れ是にはよも勝ち」とその戦況を記している。

その後の門司城は、城主もいれかわりながら続いたが、細川忠興の豊前入国後の元和元年(一六一五)、一國一城令により、およそ四〇〇年におよぶその歴史をとじた。(北九州市教育委員会と彫られている。

ここに紹介した拓影は、城址で採集した古瓦によるものである。瓦礫といえ、価値の無いものの譬であるが、筆者にとつて古瓦こそかけがえのないもので、それはいまはない古代寺院・官衙を、それが古瓦にこそ求め得られるからである。殊に古文書・記録類の少

門司城軒平瓦



も、その全面を文様で飾っていたが、中世以降は両脇が軒丸瓦によって隠れるため、拓影で見ると文様区が狭められた。

さて、採集した古瓦は、さきの元和元年の一國一城令の時以来のものであろうが、その造瓦技法もよく中世以降の手法を残しているものである。このほか、瓦当文様が磨耗しているため揭示しなかったが、技法を観察するとき、ここに示したものより古式を思わせる軒丸瓦のあることを附記しておく。

山城に本瓦葺きの建物が存在したことは古瓦がこれを証明するのであるが、その結構については残念ながら知るを得ないのである。梁塵秘抄に載る「筑紫の門司の関、関の関守老いにけり、鬢白し何とて据えたる関の関屋の関守ならば、年の行くをば留めざるらん」門司城のうえを流れた歴史の時間も、又、関屋の関守と同様に誰も留めることはできなかったの

清経の跡を尋ねて

門司区 石崎 巖

であろう。城址に残る古瓦も黙して語ることをしないのである。

おわりに、会員のひとりとして「北九州市の文化財を守る会」がその総力を結集して、とくに、埋蔵文化財を破壊・消滅から守るための抑止力として活動することを切望するものである。

追記 軒丸・軒平瓦の呼称については、この外軒丸瓦を鑿瓦・軒平瓦を宇瓦等と幾通りも呼称があるが、煩瑣を避け、丸瓦・平瓦等も含めその形態・造瓦技法の説明は省略した。

古文書には内裏の字が使われている。源平盛衰記に楊梅桃李を引き植えて九重の都に少し似たりければ薩摩守忠度

都なる九重の内恋しくば
柳の御所を立寄りてみよ

と忠度が大里でこの歌を詠んだのは寿永二年九月であったが、御所を置いたのを寿永四年の壇ノ浦の合戦の年と間違えている場合が多い。そうだとすれば寿永三年に一ノ谷で戦死した忠度が寿永四年に柳ノ御所でこの歌を詠んだことになる。

それから柳ヶ浦の地も安住の地でない事を知り、寿永二年神無月の頃またも小舟に乗り海上の旅となるが、紀伊の刑部通資が大船団を従えてお迎えに参つたので皆これに乗り移り屋島へ向つた。そこで本論の清経だが、平家の一行が柳ヶ浦を去る舟上で清経は静かに

經読み念仏して入水したとある。だが実は救助されたか脱走したのか五家荘に残る古文書によると其後四國徳島の祖谷に逗留している。それから江見次郎盛方の勧めで一行は寿永五年(文治二年)十二月に祖谷を出て伊予八幡浜から豊後鶴崎に上陸、西海道に安堵の地を求めて流浪した。由布院に滞在している時、竹田領に緒方三郎実国に救われたのが寿永六年九月十八日となっている。清経一行は此処で二年余り滞在している内、実国は病床に伏した。死の寸前、実国の願いで清経は実国の娘と一緒に緒方姓に改名したのである。そして実国の教えで薩摩へ向かったのが寿永八年(文治五年)三月七日となっている。

清経一行は途中藏岡と云う所で山賊に囲まれ問答の末乱闘となつたが十五名の山賊を生捕にし残りは逃げ去つた。そこへ山賊の一人進み出て地に伏して云うには「我はこの山賊の頭数馬と申す者で御座るが只今は手下の者供君様方へ無礼仕り何とも申訳ございませんが、万一手下の者供をお助け下されば君様方へ御安堵の地をお教え致します」とのこと、再三の數馬の願いに任せ生捕の賊供を残らず引渡した。數馬は大いに喜び一巻の図面を取り出し、先刻御安堵の場所と申しましたのは是より西南に当り凡三十里の所で白鳥山と云

い山頂は黒雲を延べたよう黒延と称えています。山深く屏風を立てたようで人の往来する者一人もなく且つ縦横は凡十二里、廻り四十里の山で五ヶ国に境し、西は釈迦院岳とて肥後領、東は日向国高千穂、南は同国那須領に接して居ります。北はぬげめ丸でこれも肥後領であります。肥後、日向、豊後、大隅、薩摩の五ヶ国に境し何処の方向にも道のり十五里で此の間には人里全くない所でございませ御案内致します。

そこで一同は數馬と共に黒延に上り四方を見渡せば五つの窪地あり數馬の言と寸分違わぬ。

天神の誓いを立てて弓を射つて落ちたる所に自分の家を建てようとした。第一の矢は南岳の窪地に落ちた。此処に左中将清経、平内五衛門家長。西嶽には上総五郎衛忠光、同三郎左エ門景経。北嶽には越中次郎兵衛盛嗣、江見次郎盛方と立ち分れ、それぞれの処に家を建て山野を開き作物を求めて定住した。これが五家荘である。

五家荘と云えば別天地と印象付けられているが源氏の目を逃れて僻地を求めた平家の苦勞が思いやられる。白鳥山の奥地を住居と定めても農具や種物衣類に難儀された事がわかる。盛嗣、忠光は種物を求めんとして豊後の緒方実国の旧地へ出たまま帰って来ない。更に數馬及び手下の者を差遣わし

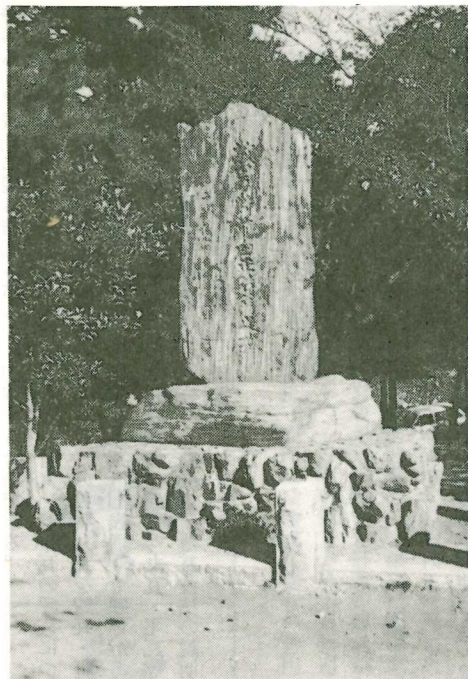
粟種二斗七升を求めて帰りに仕付をしたのは寿永十年(建久二年)五月であつたと云う。此の五家荘に残る古文書が間違

不老公園の一角に建立されている碑

門司区 松根秀隆

大正十二年関門海峡の風景を一望出来る、戸上山麓の広大な地に、小倉の安部山より、吉野松百二十本を移植し、不老公園という桜の公園を開設し、春は桜、花菖蒲、躑躅、夏は五色の噴水塔、高い高い渦巻広告灯のもとでの納涼大会、花火大会、屋外映画大会、秋は月見、冬は雪景色、四季を通じて、大人子供達の遊園地として、門司はもとより、関門、北九州の人々に親しまれた不老公園の、海が眺められる一角に、建立されている碑について。

話は明治にさかのぼりますが、今の門司港の村上パン店の元祖村上藤吉氏が、旧門司駅の食堂でパンを出していたとき、西洋での生活経験深い、農商務次官前田正名氏より、「このパンは西洋のものにも負けず立派である」とおほめの言葉を賜わり、其の後も特別の御指導により、村上のパンの名を高めた御礼にと、昭和五年、故前田翁十周年の忌辰に際し、ときの伯爵東郷平八郎元帥に揮毫を仰ぎ



い事だとすれば五家荘が成立したくなる。尚清経の末裔は今に健在であると聞いている。 建てた碑です。表には 故男爵前田正名翁之碑 元帥伯爵東郷平八郎書花押 裏には 前田翁諱ハ正名故薩摩藩士善安ノ 二子弘化三年三月生ル甫メテ九歳 英文ヲ学ヒ更ニ瓊浦に遊ヒテ切磋 琢磨ス 明治の初仏国に航シ滞留約九年研 鑽荷モ懈ラス会普仏戦争に遭ヒ挺身 卒伍ニ入りテ其難ニ赴キ備サニ 辛酸ヲ嘗ム

而モ故国ノ前途ヲ憂ヒテ戎馬倥傯ノ間其兵制ヲ究メ帰朝後諸ノ其ニ要路ニ建言シ又興業意見ヲ著シテ世に公表ス朝野其卓見ニ服シ芳名噴々たり 明治廿三年農商務次官ニ累進シ又元老院議員ニ転シ末幾病ヲ以テ致仕ス抑国家富強ノ基ハ産業の開発ニアリ即団結協力シテ列強ノ長所採リ我短ヲ補フヲ急務トスヘキニ滔々タル天下或ハ自大の陋見ニ拘シ或ハ目前ノ小利ヲ貪リ徒ラニ闘鬪ヲ事トシ儉安ニ流ル 翁深ク之ヲ慨シ屢海外ニ航シ其精粹ヲ披キテ衆庶ヲ警醒シ又到處ノ窮郷僻俚ニ入り□務ノ要ヲ高唱ス 關國ノ老壯翁ヲ倚重シテ子來シ産業団体勃然トシテ四方ニ起リ国礎漸ク定レリ翁大正十年帝京ヲ出テ博多ニ抵リテ病ヲ獲八月十一日遂ニ其病院ニ歿ス享年七十有六朝廷

籠で迎える『八十たたき』

門司区 大田 章

江戸時代庶民の刑罰には色々あつた。最も軽い『叱り』(おしらすに科人を呼び出し係の役人から『屹度叱り置く』と宣告されるもの)『過怠』(金品を出して罪をつぐなつたり、寺社・橋・道路の修繕等労役に服するもの)『所払』(居住地から追放するもの)等十以上もあつたようである。中に『敵』と云うのがあつた。刑の軽いのは五十から重いのは百まで身体を打つものである。小倉藩における敵について、中村文蔵じいさんの見聞談を紹介しよう。

先ず文蔵さんの略歴について述べると、企救郡馬寄村(現在の門司区大里の下馬寄)の人で、嘉永六年(一八五三)生である。この年は誰も知るアメリカのペリー提督が四隻の軍艦(いわゆる黒船をひきつれて浦賀に入港した年で、『太平の眠りをさます蒸気船、たつた四はいで夜も寝られん』とか、『三味船をひかずに江戸はからさわぎ』とか、狂歌がうたわれ、これから国内は、やれ開港じや攘夷じやと、にわかに騒動した年である。ついで十三才の時、農家の出ながら小倉に出て、某商家に奉公中、慶応二年(一八六六)の御変動(長州征伐)で小倉軍が負けて、八月一日小倉城を

焼いて田川に逃げた時、主家と共に一時田川に逃れた。二十五才の時明治十年(一八七七)西南の役(いわゆる西郷戦争)が起ると、夫役に志願して熊本方面の戦争を見聞した人で、非常に元気で進取の気性に富み、実直で記憶力も大層よい老人で、昭和十一年五月八十四才で不帰の客となられた。 さて前置はこれくらいにして、生前親しく聞いておつた『八十敵』について述べると、

一、場所―橋本の処でしよつた。(橋本とは小倉の紫川にかかる常盤橋のたもととことで、少し広くなつていた。今の電車の通る橋より浜側の橋で京町筋に通じている) 二、設備―竹やらいで囲んじよつた。(竹や木で縦横にあらく組んだ飯の囲い) 三、見物人―竹やらいの周囲に大勢集り中の様子をじつと眺めよつた。 四、たたくもの―割竹を三、四本かためて、よま(より糸)で巻いたものじよつた。

五、敵方―中央の荒席の上に科人を四つ這いにさせて、係の者が四人で両手両足を一人づつ押えておいて、他の係の者が竹で主に尻をたたいたなあ。中には大声をあげて、あ痛アア云うので可愛想なものじよつた。ある時気丈な相撲とりじよつたが、

負けん性出して、たたかれてしもうた時、何かこれ位と云う風で、役人の見ている前で四股をふんで見せた。見物人は皆たまたがったなあ、処がそれが竹やらいの門の中じよつたので、お上を馬鹿にした仕打ちと云うので、引戻されて、これでも痛くないなら、もつとたたいてやれと、係の役人から、またひどうたたかれたことがあつた。その時相撲とりが門の外に出て来て云うことにや、こりやちよいとしようたことをした。一生の不覚じよつた。なんの俺が門の外に出て四股ふみやあよかつたの

私が今でも使っている

リヨウドバラ(漁村)言葉

門司区 吉岡成夫

私が住んでいる地区は昔風に言えば豊前国企救郡恒見村と言う豊前十八ヶ浦の中の小さな漁村である。

この漁村で育つた私は今でもリヨドバラ(漁村)言葉をひんばんに使っているが、若い人や、他地区から移り住んで来た人には通用しにくくなつた言葉も多くなつた。そこで私が今でも使っている言葉を記録しておこうと思つてこの小稿を誌すことにした。 なお、門司地方の方言に就ては

に、門の中でやつたものじよけと云つて、口惜しがつたことを覚えちよるが、豪気なものもおつたものじよあなあ。またこんな時、哀ればい風をすると余程あつかいが、軽かつたようじよつた。 六、籠で迎えに行く―八十敵にあうと、村の者や親類の者が心配して、草切籠を持って迎えに行き、それに乗せて昇りて帰つたものじよあつた。たたかれて、はれ上つて痛む時は、豆腐をすつてつけてやると、治りが早かつたことある、まあざつとこんな風じよあつたなあ。

「門司郷土叢書」の中の方言の部に詳しいのでこれと重複するものはこれを省いた。 ※片仮名書きが方言である。 アズを切る(縁を切る) アイオイが切れる(栄養が切れて動けなくなる) アンニヤン(兄さん) アゴタをたたく(しゃべる) アズル(あきあきする) イカワテンバ(のべつまくなししゃべる)

イヤケない(気持が悪い) イシャルな(威張るな) イザリがつく(空腹のために動けなくなる) イッケンケン(片足で跳ぶこと) イオ(魚) イレル(妬んでやけること) ウルウルしている(肥えて丸々していること) ウタチイ(汚いこと) エーヨウがのぼる(身分不相応のぜいたくをすること) オカメ(物をやるのが好きな気の広い人) オトを抜かす(肝心なことを忘れること) オナゴダチラ(女のくせに) オカヤン、オトヤン(お母さん、お父さん) オキダ(平たい倉) オオモノグチ(猥談) カンジケル(手足が感覚を失うこと) カンニヤクが分らない(肝心な要領が分らない) カタイシ(樁の実) カベテヨロ(やもり) カガチ(すり鉢) キョーセイさん(気の早い人) キスイ(人情の薄い人) キツパをまわす(二人で采配を振ること) クウになる(虚脱状態) クチバクテヨウ(口が達者で実行力の無い人)

クチのカワが良い(よく喋る人) ケツのきりあがつた(身分不相応な身なりや態度) ケツのもうた(身分不相応なことを語る言葉) ケスラウ(少しばかりの関係) ケンタゴロ(糞) コソブル(くすぐる) コトのコウアンが分らない(物事の筋道が分らない) ゴンゲが無い(子供らがあつと言う間に寝つくこと) コボコボ(気持良く) ゴッポウ(大変な) ゴンがキタオキ(言葉だけで実行しないこと) コゲドウ(子供を叱る言葉) ゴウがわく(腹が立つ) コノマイ(此の人) サライシン(再来年) サナリを聞く(ことの一部を聞くこと) サスナウ(誘う) シバヤ(芝居) ジイヤン(爺さん) シラタワ(醤油の上にわくかび) スポ(ふくらみ) ズルクロシイ(けじめが無く横着なこと。怠けもの) スツパク言うな(嘘を言うな) ズメコメ(無理矢理) セリセリゴンボ(無理矢理。気ぜわしい) ソイケンド(そうは言つても) ソバエ(雨が少し降ること)

ソウバを言う(雑談を交わす)
 ダンメンダラク(しまりがいい)
 チンとクソ(仲が良い状態)
 チョチョウ(感嘆詞)
 ツングリ(水中にもぐること)
 テンノシロウ(騙すことの上手な人間)

テンスラ言うな(嘘を言うな)
 トシノヨサ(大晦日)
 トンツツ(頂上)
 トツタカミタか(取るものも取りあえずに)
 ドンのクボ(首筋の後ろのくぼんだところ)
 ドンダラガケ(たぐささん)
 トトヤン(お父さん)
 ナバイタバイ(のらりくらり)
 ニチヨウラシイ(ふさわしくない格好とか態度又は言葉等)

ネーヤン(姉さん)
 ネイリバナ(寝てすぐの間)
 ノウジがない(古くて引っぱりがきかない布地)
 ノウゴコロ(落ちつかない心持)
 バシヨの人(都会の人)
 バアヤン(婆さん)
 ハタケ(しらくも)
 ヒトミをする(人見知りをする)
 ヒッキリ根性(思いきりの根性)
 ヒラクチ(まむし)

ピツタレオドシ(急に寒くなる)
 ビシヨクタ(びしょ濡れになる)
 ヒツコトラシイ(ぐどいこと)
 ヘラうつな(相手になるな)
 ポンセーが(役に立たない人を悪く言う言葉)

ボーグラ(能のない人間)
 ボソクタ(能のない人間)
 ホケが出る(湯気が出る)
 ホーベンタ(頬)
 ボントウな人(おうような人)
 ホトクラ(ふところ)
 マゼクル(まぜあわす)
 ミチノコケ(無駄使い)
 ムキズイショウ(見えすいた追従)
 ムラジュウト(村中の口うるさい人々)
 ムタイに弱った(大変弱った)

和布刈神社と伝説

門司区

坂井政雄

和布刈神社は、下関(本州)に一番近い門司の北端に鎮座している。境内から下関を覗くと源平合戦で有名な壇の浦が目前である。この海峡には面白い話がある。

門司と下関の間はずっと昔、一つの山で続いていたがその下部に、ぼっかりと、穴があいていて潮が流れていた。神功皇后が三韓征伐の時、船の通行が困難なで皇后の御威光で一夜のうちに、山が裂かれて今の関門海峡が出来、山の土は西の方に流されて引島(彦島)になったという説(今川了俊の「道中ぎぶり」と、「日本書紀」広瀬淡窓「九桂堂隨筆」巻七には老石工の説に、昔、下関と門司は陸続がで穴門と言われて

いたが神功皇后の三韓征伐の時に軍船を通すため七年かかって、たち切ったとも伝えられている。これが穴門の伝説である。なにも覗る所がないと思っていた小さな門司に、こんな面白い伝説がある事が解ると和布刈神社を再びたずねたくなった。

和布刈神社には潮満珠(金の珠)潮干珠(銀の珠)の二つの珠を御神体として祭られ海の守護神としてあがめられている。この二つの珠の伝説も面白い。海の幸、山の幸の神話に、にぎの命に三人の子供がいて、そのうち、火闌降命と、彦炎出見尊の御兄弟は、それぞれ海神、山神として有名であるが、ある時、弟の尊が、兄神に

向い「兄さんの海の道具と、私の山の道具を取りかえて猟に行ってみましょう」と言い、兄の釣竿を借りて海へ行つたが魚は一匹も釣れず、そのうえ釣針を失した。一方山の猟には不慣れの兄も山中を走り廻り、疲れはてその上一匹の動物もなくがっかりしていたところに、釣針を失したことを弟から聞き激怒し弟神の詫びを聞き入る方なく、自分の大切な剣を打ちこわし立派な釣針五百本を造り兄神に差し上げてお詫びしたがなお許してもらえず、困った弟神は海辺で悲しみ、ふさぎ込んでいた。そこへ、塩土翁という海の神様が通りかかり、弟神の話しを聞き、塩土翁は弟神を気の毒に思い自分の目無籠の船に弟神を乗せ竜宮への道を教えた。船は海神綿津見の御殿の門のわきの井戸の上にさしかかり、かつらの木の上に乗っていると海神の娘豊玉媛に見つけられ竜宮へ案内された。そこで釣針をいただいた。竜宮から帰る時「この釣針を兄神へ返される時、必ず後向になってお渡しなさい。それから、兄神が高い所へ田を作れば、あなたは、低い所にお作りなさい。私は水を自由にできるのです。あなたの田に水をさし上げます。その他、なんでも兄の命と反対のことをなさい。しまいは、あなたをきつと、ねたんで殺しに来る

にちがいありません。その時はこの潮満の珠を取り出しておぼろしなさい。しかし兄神が助けを求めたらこちらの潮干の珠で水をひかせ救つてあげなさい」と言つて二つの珠を弟神に差し上げた。弟神は帰り着くと、海神の言われた通り釣針を後向きになって返した。その他のこともその教えの通りにすると兄の命は怒つて、弟の尊をあやめようと追つたが、潮満珠、潮干珠を使いわけなんなく災害を防ぎ、兄神の命にかわつて、海のことを、つかさどるようになった。この様な伝説の二つの珠が御神体とは、和布刈神社も夢とロマンに満ちあふれた神社ではなからうか。

この神社に古くから和布刈神社が伝えられている「李部王記」によれば和銅三年(七一〇)和布刈神社のワカメを朝廷に献上したとの記録があり、奈良時代から行われていた。神事は毎年旧暦大晦日の深夜から元旦にかけての干潮時に行われる。三人の神官が、それぞれ松明、手桶、鎌を持って海に入り、わかめを刈り採つて神前に供える。もともとワカメは海神の依り代であるからこれを元旦に刈り採つて供え新しい年の豊漁を祈る。すなわち新年の予祝行事として行われてきた。現在、和布刈神社は一般公開されているが、昔は秘儀とされていた。この神事が行

未知なる国インド：日本を離陸した時、期待と不安(体に自信がなく)で胸が一杯でした。

インド最大の新興都市カルカッタに真夜中十二時に到着、時計の針を三時間半戻し日本の時刻と暫くは対照したりしておりました。

インド：なんだか広くて掴みどころのない人口八億の国です。狭い日本の均一性は見られませんが、自然も言語も宗教も人々の生活も多種多様であり、その「さまざまなもの」と、それを「統一するもの」、この二面こそがインド的世界であり、二面が重なり合うところにインドのプロフィールがあります。

インドは貧困に喘ぐ国、近代化の遅れている国と思うのは早計です。日本とは桁違いの古い歴史と豊かな地下資源をもち、教育もまた急速に進みつつあります。どちらの国が進んでいるかということ

は悠久の時間の前には色褪せてしまふ。四千年以上も昔よりつづいて

インドの旅に思う

門司区

篠森信子

すべて戸を閉じ灯を消して早くから寝たといわれている。尚、県指定無形民俗文化財に指定されているのは一連の神事のうち、ワカメを刈り採る行事の部分だけである。

ていけるガンジスの流れのように、いつ尽きるとも知れない歴史の流れを思う時、先進後進などというのは所詮ほんの小さな一つの流れの比較に外ならないと思います。貧しくても心豊かにのびのびと生活して行く態度、人なつこい眼差し、長い忍従と庄政にも掛けず確りと大地に根を下し逞しく、インドはすべてを有るがままに許容しながら悠久の歴史をしたたかに生き続けて行く不思議な魅力に満ちた鏡の向こうの国です。

さて翌日から一日中汽車に揺られカルカッタ(ガヤー)のこの辺りの鉄道は日本の終戦当時の貨物列車のよう)は超満員で屋根の上にも人が沢山乗っている。トンネルがないのが幸いです。

空路パトナー(ネパール王国の首都カトマンズ、宗教文化に彩られた神秘的な町で海拔千三百米の盆地の中心にあたります。旧王宮の近くに少女を生き神様として祀るところがある。人々の

前に顔を出す。写真撮影は禁じられており、四、五歳からの女子で初潮をみるまで生き神として祭事を司る。その間、彼女は親とも友人とも家とも離れ一歩も外に出ず神として生きなければならぬ。深い衝動を覚える。

今一つはヒンズー教の聖地ベナレスでの敬虔な祈りです。全国から集った信者でこのガード(八十里あります)は大へんな賑わいがあります。薪の山の上に死体を積み火葬にして骨と灰を聖なる河に投げこんでいる人たちが、河にひたつて頭から水をかぶつたり口を漱ぎ一心不乱に沐浴している姿です。思いがけない光景が次々と目の前でくぐり抜けられます。

幾日かバスの旅のつづいたあと、夜行列車に乗り、一晩中暖房のない車で毛布一枚の寒い夜を過ごし、早朝アーグラに着く。アーグラではイスラム建築の傑作の一つと言われる墓廟タージ・マハル、十七世紀に二十二年の歳月をかけて造った白の大理石に宝石を嵌め込み絢爛豪華な建築美をつくり上げています。美しい愛妃のための一人の王様のロマンです。

アジャンター：アウランガバード北一〇六K、車で約三時間、彎曲して流れるワゴラ川沿いの絶壁に二十九の仏教石窟院が並んでいる。壁に描かれた女性や宮廷生活図、柱や壁天井入口の上部に

刻まれた彫刻や仏像などはインドが世界に誇る遺産で、紀元前二世紀から紀元後八世紀にかけて約一千年の歳月をかけて仏教僧たちは人里離れたこの岩壁に彫りぬいたのです。その後仏教の衰退と共に一千年以上忘れ去られた存在となっていました。一八一九年向いの山に虎狩りに来ていたイギリス軍人によって発見され一躍有名になったものです。

十五日間の旅を終えて帰って来て新幹線の車窓より眺める風景は

静泰院・満隆寺の今昔

門司区

浜田実

とても新鮮で美しく見えました。移り替る田園風景は長閑で山の緑が目につきました。日本の国は四季に恵まれて幸せだと思えます。こんな素晴らしい自然に調和した文化遺産を損なわずに子孫に残したいものです。

北九州市も旧松本邸、森嶋外旧居等文化財史蹟が復元されていることはよるこぼしいことです。一人でも多くの人たちに呼びかけて和を揚げ文化財を守って行きたいと切望する次第です。

天竜山静泰院(臨済宗妙心寺派本尊観世音菩薩)は豊国学園高校敷地の西隅、門司区柳町四丁目十一番二十六号にある。高僧蘭山和尚在住中の盛時には、東西二十八間南北二十四間面積二反二畝二十三歩約二、三〇〇平方メートルの境内に本堂鐘樓庫裡宿舎などあつて諸国から修業僧数多くいたという。現在狭い敷地には僅かに小さな御堂石仏をまつる祠、修業中客死した僧の墓石四十数基が集められているだけで訪れる人も稀である。

静泰院は小倉初代藩主小笠原忠真の弟小笠原出雲守源長俊(法名静泰院殿義翁傑信大居士)の子長繁が父の菩提を弔うため小堂を建てたのははじまりといわれている。長俊は三代將軍に仕え五千石を領していたが致仕後この地に隱居して万治元年(一六五八)四月二十六日五十二才で他界した。長繁は翌万治二年小堂を建て静泰院を寺号とした。長繁(一七〇八歿)は連歌をたしなみ宗因連歌百韻にも名を連ねている。又常学院雲海が靈夢によって発掘した一寸八分(約六センチ)の像を見て弘法大師の閻浮檀金像であろうと考え修飾した。蘭山和尚(一七九七歿八十才)山形の人、諸国修業の後小倉の開善寺から明和七年(一七七〇)に静泰院に入ったが、藩主の庇護で寺も整いつつあったが、諸国から修業僧来たり禅学の大殿堂をなしていたという。蘭山は本山の要請